

令和4年度 学校自己評価システムシート(県立杉戸高等学校)

目指す学校像	一人ひとりの能力を確実に伸ばし、夢の実現を支援する学校
--------	-----------------------------

重点目標	1 進取の気概を持ち、社会に貢献できる人材を育成する 2 総合的な知の習得を行う 3 地域との交流を深めた教育活動を行う
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※ 学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者 7名
	事務局(教職員) 10名
	生徒 2名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価					年度評価(1月26日現在)		
年度目標					年度評価(1月26日現在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	コロナ禍後を見据えて、学びの継続性を支えるためには全授業におけるICT活用の効果的な授業実践が不可欠であり、本校ではそのためのスキルを引き続き積み上げていく。本校の方向性をあらためて教職員全体で共有し、推進していくためにも将来構想委員会を早期に機能させ、組織的に対応していく。	①教員の教科力向上 ②第1志望に向けた進路指導の充実	①毎回の授業冒頭で教員が「本時の目標」を生徒に伝え、学びの目標を明確にする。 ①クラス全員がタブレットを用いた授業を年間30回以上実施する。 ②最新の進路情報を生徒・保護者に提供し、幅広く進学補講を開講する。 ②勉強マラソンや土曜開放の利用を推奨するとともに、学習サポーターを活用する。	①授業アンケートで、毎時の授業の目標の明確化がなされていたとの回答を得ることができたか。 ①学校生活アンケートで、ICTの活用による授業の理解度は向上したとの回答は得られたか。 ②国公立型の共通テストの出願数の増加と合格者10名以上は達成できたか。難関私立大学の実質合格者数は25名を超えたか。 ②勉強マラソンの参加人数は増加したか。土曜開放や学習サポーターの活用状況は向上したか。	①授業アンケートで授業の目標が明確化されていたとする回答は84.1%であった。 ①学校生活アンケートでICTの活用により授業の理解が深まったとする回答は67.8%(昨年61.7%)であった。 ②共通テストの出願者数は234名で割合は微増した。 ②勉強マラソンの参加は1年生が120名強、2年生が90名強で、微増である。土日開放、学習サポーターについては、利用者数は一桁で少ない。	B	学びの継続性を実現するためには、ICTの効果的な活用が不可欠であるとの認識は教員間に浸透している。今後は、通常授業におけるICTの効果的な活用を教員間で共有し、授業の質の向上、教材作成等の時間短縮に繋げたい。また、土曜開放は利用者数が通年で数名の状況が続いている。学習サポーターは教員の働き方改革に結びつく活用を考えたい。
2	生徒の学びは多様であり、できるだけ個に寄り添った対応が望まれる。そのためには、一律な教授法のみではなく、特性を有する生徒への働きかけを教員側が熟知していなければならない。また、学びは教授されるべきものとの認識が生徒側に強く、それが学びの本質を歪めることを踏まえ、主体的な学習方法の確立を組織的に構築していく必要がある。	①生きる力を支える学びの充実 ②心の教育の充実	①年度当初に1学年対象の「スタートアップ・プログラム」を実施する。 ①国際交流を推進し、異なる価値観が触れ合う場を提供する。 ①R5入学生の一人一台端末導入に向けた環境整備を進める。 ②在り方生き方教育を見直し、本校生徒に見合った教材をもとに心の教育を推進する。 ②校内の研修会等を通じ、特性のある生徒への具体的関わりや支援を充実させる。	①「スタートアップ・プログラム」実施後の、生徒アンケートによる満足度や効果は高かったか。 ①アジアからの留学生や中国との交流は推進されたか。 ①関係業者と情報を共有し、校内整備を進めることができたか。 ②生徒が抱える問題に組織的かつ速やかに対応できたか。いじめ重大事態は0であったか。 ②教員向けの校内研修や情報提供はなされたか。また、個別の支援計画を作成し、対象生徒や保護者への支援を行ったか。	①スタートアップ実施後のアンケートでは、プログラム、講師への満足度はそれぞれ99%、100%であった。 ①バン格拉ディッシュからの留学生を1学年に1名、7月から3月まで受け入れた。中国の学生とのオンライン交流は6月、7月、12月の3回行った。 ①一人一台端末は、将来構想委員会にて詳細を決定した。 ②いじめ重大事態は0であった。学年、企画委員会でも共有し組織的に対応した。 ②特性のある生徒については情報共有の場に管理職も同席した。	A	本年度から実施の「スタートアップ・プログラム」は1年生生徒から非常に好評であった。理念を校内で共有し、次年度以降も本校のスタンダードとして継続実施をしていきたい。また、1学年全体で税に関する作文に応募し、本校から3名の生徒が表彰された。挑戦することの後押しを今後も行っていきたい。特性のある生徒については、校内的な共通理解の隔たりを是正し、共生社会実現に向けての足掛かりとしていきたい。
3	コロナ禍により、地域との交流が制限される中、感染予防対策を講じつつ実施可能なものについては積極的に取り組む。あわせて、教職員の働き方改革の観点からも内容を精査していく必要がある。本校の大きな課題として生徒募集があり、駅から近い地理的な利点を活かしつつ、本校の取り組みと魅力をいかに効果的に情報発信できるかが課題である。外部媒体機関や地域への効果的な情報発信を推進していく。	①地域交流の推進 ②積極的な広報活動	①「総合的な探究の時間」を通じ、地域が抱える諸課題について認識させ、地域に活かすための方策について考えさせる。 ①部活動やその他の交流等、コロナ禍により実施できなかったもので、可能と思われるものについて慎重に実施を進める。 ②部活動、校内諸行事等の最新情報を素早く学校HPに掲載する。 ②外部媒体機関、本校発行の各種通信、PTA等を効果的に活用し、本校の教育活動を外部に向けて積極的に発信し、生徒募集に繋げる。	①地域が抱える課題に即したものとなっているか。SDGsの視点は踏まえられているか。 ①コロナ禍での感染防止対策を踏まえ、部活動やその他の校内関係各所と地域との交流はなされたか。 ②学校HPへの記事の掲載は速やかになされたか。また、記事の掲載数は昨年と比べて上昇したか。 ②外部媒体機関への情報提供はなされたか。また、各種通信の発行数の上昇、PTA等との効果的な情報共有はなされたか。	①「総合的な探究の時間」については、各学年ごとの計画に基づき地域の学びを深めた。 ①「小高スポーツ交流事業」は、10月27日に杉戸小で陸上競技部が、11月からは杉戸第二小で1日にバスケットボール部が、2日にサッカー部が、17日に空手道部とサッカー部がそれぞれ参加した。 ②学校HPへの記事の掲載は各担当部署により更新回数のばらつきが見られた。 ②外務省職員による生徒向け講座にテレビ埼玉から、部活動へ幻冬舎からの取材があった。各報道機関への投げかけはその都度行ったが、なかなか取材に結びつかなかった。	B	本年度は杉戸町内の小学校との交流事業が複数実施され、本校の空手道部、バスケットボール部、陸上競技部、サッカー部の生徒が参加した。地域との交流はコロナ禍で制限されていたが、今後も状況を総合的に判断しながら実施を継続していく。本校の教育活動の外部への効果的な配信については、引き続き最重要課題とし、生徒募集に繋げていく。12月には、本校の創立50周年記念事業の一環としての制服改定に向け、生徒、教員、保護者、評議員にアンケートをそれぞれ実施した。

学校関係者評価
実施日(令和5年2月20日)
非常に熱心に指導を行っていることを感じる。成果は急に出るものではないが、今後とも継続的な取り組みを期待している。 ICT機器の効果的な活用については、小中学校でも取り組みを始めている。具体的には今後は、教員合同研修を実施し、ICTやデジタル教科書等の効果的な活用について学び、生徒の学びの継続性、連続性と新しい時代に生きて働く力の育成に努めていく所存である。学習意欲の向上については、根底に生活意欲の向上が不可欠であると考えている。学校生活の充実策と並行して考えていくことが必要ではないか。 進路指導の評価については、局所的な評価の有効性について検証が必要だ。あわせて、土曜開放、学習サポーターは利用者が少ない現状を踏まえ、生徒や保護者の理解促進に向けた丁寧な説明をお願いしたい。
新行事の「スタートアップ・プログラム」については、アンケート結果を見て大変に素晴らしい数値であり、杉戸高校の新入生行事として次年度以降への期待値も大きいと考える。 一人一台端末の活用は、杉戸高校の教育活動の根幹となり得るものである。活用の停滞化は社会が求める人材育成から距離を置くことになる。教員の負担は増すが、未来社会を担う人材育成に向け、取り組んでほしい。 国際交流については、生徒の価値観を揺さぶる素晴らしい機会を創出している。現代は様々な特性、個性のある生徒への理解と対応のスキルが求められる時代である。共生社会の観点から、教職員が専門性を高め、人権意識を向上させていくことが、生徒に人権感覚を身に付けさせる第一歩である。非常に重要なことであり、全校体制で教育活動に取り組んでほしいと考える。
杉戸高校の「総合的な探究の時間」は一定の成果を上げている。ここで培った力は大学進学後、社会人となったときに大きな財産となる。「小高スポーツ交流」への参加部活動が増えているのは素晴らしい。今後、多くの部活動が新たに参加することを期待するとともに、文化部が交流する仕組みも考えたらどうか。 地域交流は、杉戸高校生にとっても地域にとってもお互いをよりよく知る良い機会である。広報活動も交流の現場の紹介に終始するのではなく、生徒の成長する視点を取り入れていくことも大切ではないか。さらに、現在の小高連携の枠を広げ、中高連携も進めていけたら素晴らしい取り組みとなるだろう。ぜひ、進めてほしい。 制服の改定については、良い取り組みだと考える。生徒、保護者、卒業生の声にも耳を傾けつつ、丁寧に進めていってほしい。 杉戸高校は、指導についての改善をしっかりと行っていることを指摘したい。登校時の歩きスマホについて昨年度お願いをした際にも素早く対応し、劇的に改善された。引き続きの対応を期待する。